琉球大学学術リポジトリ

自閉症スペクトラム障害児における他者への同一化と自己存在に関する不安の軽減　－フラッシュバックからの自己形成過程と他者との関係性の形成による支援－

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター
	公開日: 2012-04-24
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浦崎, 武, Urasaki, Takeshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24200

琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要
No.3, 2012.

自閉症スペクトラム障害児における他者への同一化と自己存在に関する不安の軽減
―フラッシュバックからの自己形成過程と他者との関係性の形成による支援―

浦　崎　　武*

The Identification to the Others and Uneasy Relief about Self-existence in a child with Autistic Spectrum Disorder
―The Self-formation Process from a Flashback and Support by the Relationship of the Others―

Takeshi URASAKI*

現在、社会に適応するためのスキルトレーニングは重要な支援法として発展を見せているが、スキルを身に着けて必死に社会で適応することが可能になったとしても、その努力をすることの苦しさ、自分自身が、今ある自分自身について理解することの苦しさ、自分の特性を「どのように受け止めて生きるか」という自分自身への問いへの支援が必要である。そのような自分自身の障害と「どのようにつきあっていくか」という根本的な心理的混乱の軽減に結び付く「自己同一性の発達的課題」に対する支援アプローチは極めて少ないのが現状である。そこで本研究では、11歳の時の学校での外傷体験をフラッシュバックした男児が、14歳になり理想の自分の姿を「あの世」に求めて、「あの世」で現実のお気に入りの重要な他者と同一化することを願い続ける事例を通して、<私>としての自己のなりたちの過程、支援のかたちを検討した。そして発達の程度に関わらず、現実との違和感を感じる自閉症スペクトラム障害者における他者との同一化は、彼らの漠然とした不安を解消し安心、安全を得ようとする行為として考えられることから、その個々に異なる自己像を形成する行為への理解と支援の必要性が示唆された。

Ⅰ．はじめに

アスペルガー症候群、高機能自閉症児等の自閉症スペクトラム障害の自伝において、「私」と言う自己意識の揺らぎを象徴するタイトルが付けられている。彼らの自伝は「何が本当の自分なのか」、自分は「普通であるふりをしている」と自己同一性の獲得のための自分探しの物語のようである（Williams, D, 1992 ; Gerland, G, 1997 : Willey, A, 1999）。

浦崎（2002）は170cm代の身長を200cm代に高くしたいと望むアスペルガー症候群の青年との関わりを報告した。彼は自分の名前も、自分の親も、自分の身体も本当のものではないという「自己同一性の獲得」に関する課題に悩んでいた。また、浦崎(2011)は聴覚の過敏性で苦しむ青年について報告を行った。その青年は具体的なソーシャルスキル自体を身に着ける努力をし続けざるを得ない、自分自身の特性や自分の置かれている状況を受け入れること自体に苦しみを感じていた。ソーシャルなスキルを身に着けるだけでは解消できない「自己同一性に関する問い」に対してどのような支援が必要になるのであろうかについて考えていくことが必要である。

* Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

現在、社会へと適応するためのスキルトレーニングは重要な支援法として発展を見せているが、スキルを身に着けて必死に社会で適応することが可能になったとしても、その努力をすることの苦しさ、自分自身が、今ある自分自身について理解することの苦しさ、自分の特性を「どのように受け止めて生きるか」という自分自身への問いへの支援が必要である。そのような自分自身の障害と「どのようにつきあっていくか」という根本的な心理的混乱の軽減に結び付く「自己同一性の発達的課題」に対する支援アプローチは極めて少ないのが現状である。

学童期は、自己を形成する上で重要な時期である。特に９歳、10歳の学齢期は通常の発達では集団による仲間意識が強まる時期とされる。その時期は高機能自閉症児にとって「心の理論」を獲得する重要な時期であることが実証されている。別府（2007）は、高機能自閉症児は突然見え出した他者の心に対して「自分はどうみられているか」を強く意識し周りの子どもたちが仲間と関わる様を見るにつけて、仲間の存在の重要性を認識していくと述べ、さらに実践的取り組みを行ってきた辻井（1999）は「心の理論」の獲得によって返って心理的混乱を生むことを指摘している。そのような心理的混乱は対人関係のトラブルや抵抗感を生み出す要因となることが指摘されている。

その原因となる自己同一性の解明には「他者との関係性の変容過程」の詳細な質的分析が必要であること、そのための「自閉症スペクトラム障害児の自己理解や他者理解の変容」について、他者との関係性を基盤とした支援による長期的で、ボトムアップ的な他者との関わりのエピソードを整理することや子どもの置かれた状況や文脈に沿った行動の分析が必要であると考えてきた。

浦崎（2010）は、アスペルガー症候群である小学６年生に生じたフラッシュバックと自己存在に関する不安について整理した事例を報告した。その報告以降の経過について再度、振り返り、小学校の段階で生じたフラッシュバックを軽減させ、自己同一性を獲得するために必要とされる支援について考えたい。

そこで本研究ではフラッシュバックと自己存在に関する不安と願望の変容過程、その際の他者との関係性や当事者を取り巻く学校や日常生活等の環境の変容、プレイルームにおける筆者との関わりや母親面接による情報を整理し、その支援の在り方について検討したい。

Ⅱ．方　法

１．生育歴の記録

対象について家族構成、乳児期、幼児期おおよそ３歳までは筆者との関わりがなかったので、保護者や保育士からの面接による情報である。幼児期はおおよそ３歳以降からはＡ男の関係者からの情報以外に、筆者が直接見たり関わったりした上での情報も含まれている。筆者は４歳から本児（以下、Ａ男）と関わるようになった。

浦崎（2010）はＡ男の状態の変容および保育園、学校の支援のあり方の変化に応じて、３つの時期区分に分けて整理した。乳幼児期の本児の特徴が表れる乳幼児期の特徴を第１期として表１に、心の理論の成立に至る年齢といわれる時期として学童期前期(小学校１年から小学校３年)の特徴として第２期および心の理論を通過するといわれる時期として学童期後期（小学校４年から小学校６年）の特徴を第３期として、第２期、第３期を合わせて表２に、そして小学校４年から小学校５年生の学校の様子と小学校６年生のフラッシュバックと自己存在の不安の状態について記述する。

２．遊戯面接の記録

小学校６年生から特別支援学校中学部への入学後、２年生の12月まで筆者がＡ男の支援を行っているプレイルームでの実際の遊戯面接の場面と親面接の時期を第４期として、遊戯面接および親面接の情報を記述する。遊戯療法的な関わりと現実的な話題を扱う面接的要素を含んだ中間的な関わりのスタンスをここでは遊戯面接と表現する。

月２回のセッションを小学校６年生１月から特別支援学校中学部２年生の12月までの期間において記述する。対象児の情報の記述については個人が特定できないように工夫、配慮する。

３．記録方法と考察

第４期の小学校６年生の卒業前から特別支援学校病弱クラス中学部１年から２年（12月）までの遊戯面接の経過について記述する。

①A男とのプレイルームでの関わり、および親面接をＩＣレコーダーに音声記録することにより、筆者とのやりとりを記述する。

②記述したやりとりを時系列に整理する。

③記述したやりとりを表に検討すべき項目別に整理し、具体的なＡ男の言動による表現を通して項目ごとに分析する。項目は他者との関係性と不

安・願望・興味・関心の変容過程を捉えるため、「特徴的な行動」、「他者との関係性（プレイルームでの関わり）」、「不安・願望（将来に関する願い）についてのプレイルームでの語り」、「興味・関心（日常生活）」とする。

④生育歴と遊戯面接の記録、およびその記録を項目ごとに整理した表をもちいて、「不安と願望」、「学校生活・日常生活」、「興味・関心」、「フラッシュバック」、「支援」について検討し、総合考察する。

Ⅲ．支援経過

1．対象（フラッシュバックと自己存在の不安が顕著に見られていた小学校6年時の状態）

対象児は、現在、特別支援学校中学部の男児（以後、A男）である。小学校6年の時は新築の家がなじめず祖父母の家で過ごしていた。特別支援学級に籍を置いているが学校に行けない日も度々あった。人の目を気にすることが少しずつ増えて学校でも外でも手やかごで顔を隠すようになった。お気に入りの若い女性のタレントがいて、その人のことを思い浮かべてはニヤニヤとファンタジーの世界に浸っていた。時々、調子が崩れると5年生の時の担任との外傷体験を思い出して興奮し落ち着きがなくなった。動きも以前と比べ変わったようでゴリラのようにふらふらとがに股で歩くことが多かった。

2．家族構成

家族構成は、父、母、姉（大学生）、A男の4人家族である。朝は、父親に小学校まで送ってもらい登校した。放課後は自宅より学校に近いところにある父方の祖父母の住む家に帰宅して過ごし、仕事が終わった父親とともに自宅に帰宅した。育ちの過程においてどちらかと言うと父親の方が母性的な役割を果たしてきたが、小6の頃は父親への反抗的言動が増えて、母親への関わりのあり方も変化が見られるようになった。小4の頃は祖父や祖母をからかい怒らさせ、その怒った顔を見て笑っていた。小6では家を新築したが新しい家になじめずひとり祖父母の家で生活していた。

3．診断と心理検査

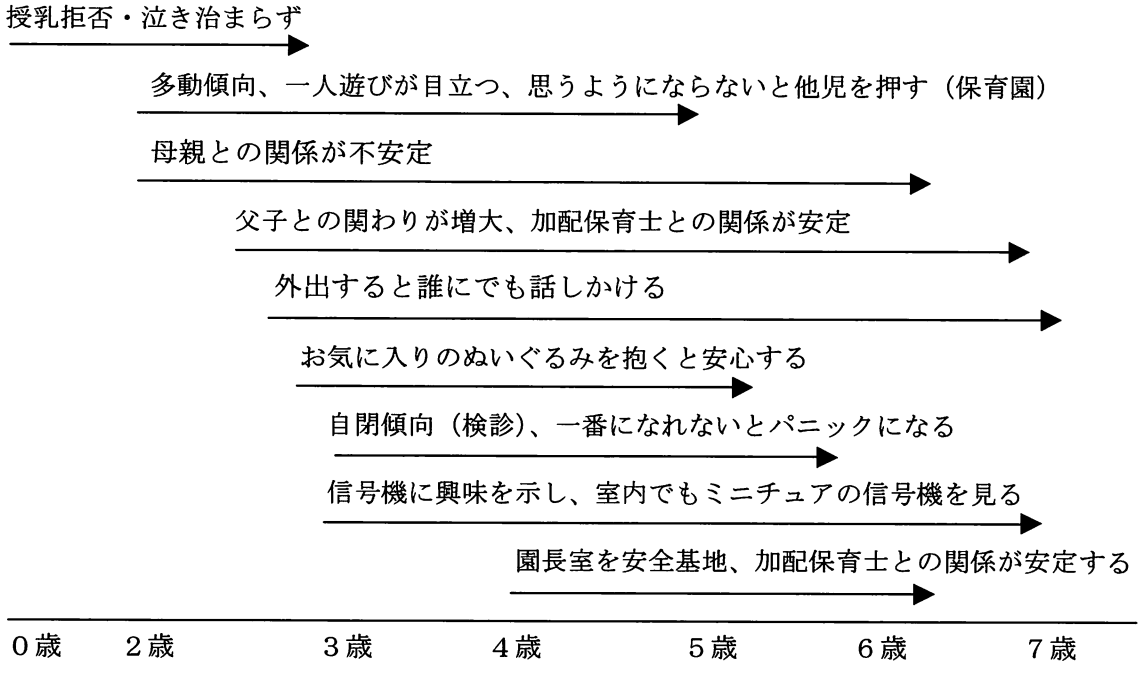
小学校3年生の時、精神科クリニックでアスペルガー症候群として診断され、WISC－Ⅲ知能検査を施行する。その結果は以下の通りであり、能力の偏りが見られた。

全検査IQ74、言語性IQ77、動作性IQ76であり、下位検査から個々の能力のアンバランスさが見られた。言語性では「算数」が13、「数唱」が15と高い。「類似」が2、「単語」が4、「理解」が4であり得点が低い。動作性では「迷路」が15で高い。「絵画配列」が4、「積木模様」が5、「組み合わせ」が4と低い。

4．生育歴

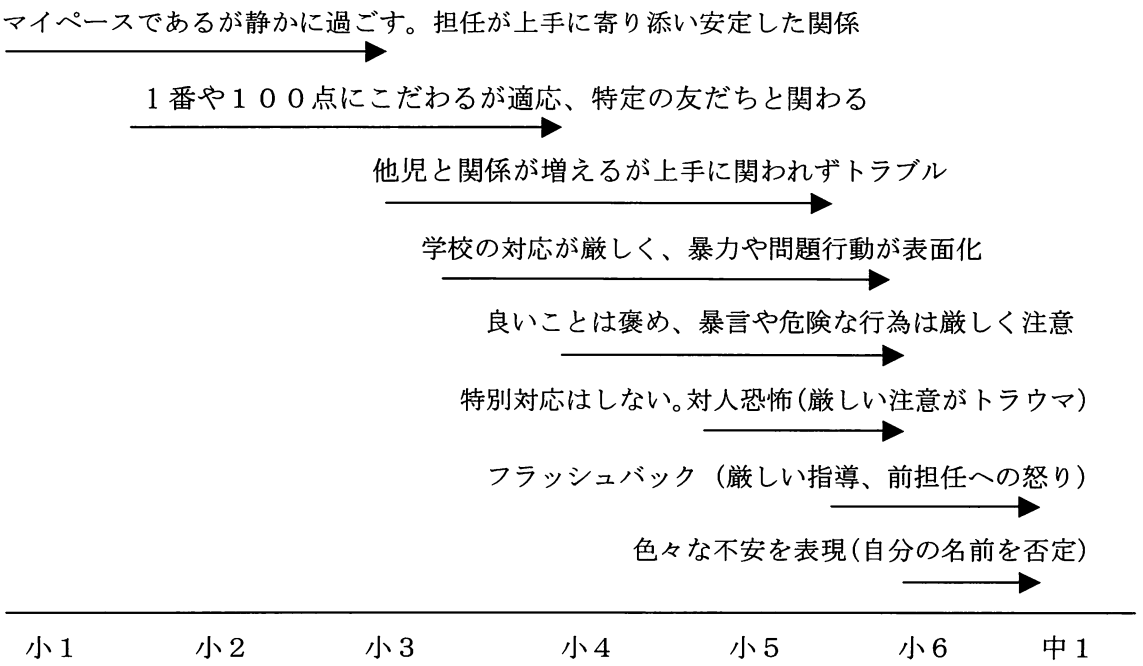
A男の状態の変容および保育園、学校の支援のあり方の変化に応じて、3つの時期区分に分けて整理した。乳幼児期の本児の特徴が表れる乳幼児期の特徴を第1期として表1に示す。

表1　乳幼児期の本児の特徴的行動



心の理論の成立に至る年齢といわれる時期として学童期前期（小学校１年から小学校３年）の特徴として第２期および心の理論を通過するといわれる時期として学童期後期（小学校４年から小学校６年）の特徴を第３期として、第２期、第３期を合わせて表２に示す。

表２　学童期の本児の特徴的行動



５．フラッシュバックと自己存在の不安

第３期の小学校４年から小学校５年生の学校の様子と小学校６年生のフラッシュバックと自己存在の不安の状態について記述する。

４年の担任は１年の時と同じ担任であったが、１年の時と同様に本児の求める行動をすべて受け止めて関係性を形成することは容易ではなくなっていた。小学校５年ではたび重なる気になる行動に対する支援に限界を感じ、学校と親との関わりも悪くなった。小学校４年生、５年生の時の学校の支援方針の転換によりその支える他者が不在となっていったように思われる。学校は小学校４年生の時は特別な支援を行わないという方針を示し、本児の問題行動に対する厳しい対処、対応を取るようになった。その本児への対応は「みんな、俺のことが嫌いなんだ」というような独自の意味づけで本児に受け止められ、結果として自己評価の低下に繋がっていったと考えられた。注意や指導をする他者の意図が伝わらず「嫌われている」という被害感を作り出し、さらに５年生で怒られて追いかけられた体験が絡まりあって、フラシュバックの現象と自己存在の不安へと繋がっていったように考えられた。

小学校６年の担任になると柔軟な対応に切り替わった。本児は小学校６年生になって不安と自己についてはっきりと言葉で表現するようになった。本児への支援や教育のあり方が各学年、各担任によって定まらなかったこと、親との考えとも共通理解が得られなかったことは、本児のフラッシュバックや自己存在の不安を作り出す一つの要因になったように考えられた。

特徴的行動として、筆者と会う時も帽子やソファカバーで顔を隠している。不安の高まりと生活のリズムの乱れにより夜も寝られない。食事を独りで食べるようになったり、お風呂に入れなくなったり、対人との関わりの減少と生活のリズムの乱れが見られた。その背景には過去の嫌な体験をフラッシュバックしたり、未来の見通しがつかない不安があるように考えられた。特にフラッシュバックについては感情を治めることは容易ではないようであり、前担任Ｂとの関係のなかで生じた嫌な出来事を体験した時の感情が湧いてきて、電話をして話がしたいなどとその感情の処理に苦しんでいた。不安定な時はＢ先生の言い方や行動まで細部のことも思い出された。６月の６年生のＯ先生との関係が良好な時にはＯ先生に注意されても、その怒りの矛先はフラッシュバックの対象となるＢ先生に向けられることが

あった。このことからもA男との関係性のあり方が本児のトラウマのフラッシュバックに影響を与えていることが推測された。O先生がA男に注意や指示を出し、過去のB先生との体験へとフラッシュバックすることが見られた（6月）が、O先生との関わり自体が今後の外傷として残ることはなかった。時々、A男がO先生への不満をもらすことはあったが、それは一時的な不満で治まり新たなトラウマへと発展することはなかった。良好な関係のある他者に受ける注意や指摘は、フラッシュバックを呼び起こしても、過去の外傷を受けた対象へと向けられていた。

一方、本児は過去への想起以外に、現在の自己存在に関連する未来への不安を語った。「前年の友だちRのことを今の先生に知ってもらいたい」とか、「自分が卒業後に入ってくる子どもに自分のことを知ってもらいたい」など、お気に入りの友人や自分の存在を知ってもらいたいという意図が考えられる発言であったが、そのことは知ってもらえたらいいなというレベルではなく、知ってもらえないと落ち着かないという不安のようなものが感じられた。7月に「俺は男で良かったのか、女で良かったのか」と言い、現在の男としての自己存在を問う発言をしていたが、11月になりフラッシュバックが軽減してくると、次は現在の自分に対して「俺はHだ」、「この世界にいる時はH、あの世界ではK」などと語り、自分の名前は「情けない名前」、「変な名前」と言うようになった。

12月には「(今回、俺がプレイルームに）来ると思っていたか」、「残念と思ったか」、母親にも「(お気に入りの）Kがこのような時、どう言っているのか」と聞き、母親が「こうやっている」と答える等の行動が見られるようになってきた。1月には「どっちの名前が良い」、「Kちゃんのオチンコを触ったらイヤ～と言うだろうか」と筆者の気持ちやお気に入りのKちゃんの反応がどう返ってくるのかを確認してくることが見られた。

過去へのフラッシュバックには、私という存在への揺らぎが見られる。声と顔が似ているという自分なりの意味づけをして、上手くいかない「情けない自分の名前」を、その声と顔が似ているという理由で他者の名前に変えようとしたり、性別を選ぼうとしたり、「俺はD、Hがおならをしました」と自分を他者と入れ変えたり、また「あの世に行きたい」と今の自分を移動させようとしたりすることで、物事が上手くいかない、分からない、満たされないという苦しい状況を乗り越えようとしているように考えられた。

現在と過去が交差するフラッシュバックの現象やそれにともなう不安の背景には自己存在基盤の脆弱さが見られた。「この日がすぐに来る」、「今と思っているとすぐに明日になる」、「今日もすぐに明日に変わってしまう」等、移り変わっていく今という「時間への意識」や自己存在の基盤としての自己の歴史性の形成についての検討の必要性を感じていた。

6．遊戯面接の経過

小学校6年生から特別支援学校中学部への入学後、2年生の12月まで筆者がA男の支援を行っているプレイルームでの実際の遊戯面接場面と親面接の時期を第4期として、遊戯面接および親面接からの日常生活の情報を記述し、小考察をする。A男の言葉を「　」、筆者の言葉を＜　＞で示す。また、表4に他者との関係性と不安・願望、興味・関心の変容過程について整理する。

小学6年生、3、19

硝子叩いたんだよ。学校の出来事を話す。小学5年生の時の担任の先生に注意されたことも話す。「小平奈緒を見たいな」と言う。「K（お気に入りのスポーツタレントの女性の名前）もいいな」と言う。写真を見せてあげる。「恥ずかしい」、「恥ずかしい」を繰り返す。「(Kの写真を見て)足が見えるな」、「恥ずかしいな」と繰り返す。

相撲の話しになる。白鵬、把瑠都等の名前が挙がる。2つのぬいぐるみで紙相撲をするように向かい合わせて立たせて、カーペットを揺らして相撲をして見せる。

3学期に入って、(学校へ）行ってる回数分かるよ。11回行ったよ。少ないと思うか。3学期に入って。＜少ないな＞、O先生を困らせると、面白いよな。

小考察

大好きな女性タレントKの写真、足を見ている。性への意識が芽生えている。先生を困らせて喜んでいる。好きなタレントの足を見て「恥ずかしい」と言う言葉をしきりに使う。Thは興味のある相撲をぬいぐるみを使うことで関わりの接点が生まれる。

特別支援学校中学部1年生、5、3

小学校に行ってきたよ。校長先生に会ってきた。校長も教頭も、Fという名字だ。＜何をしに行ったの＞、学校好きだから行ってきた。

あの世にいきたいか＜行きたくないな＞、そうか。あの世には行きたいな。あの世に行って「K（お気に入りの女性スポーツタレントの名前）になりたいのだよ」と言う。「Kになりたい」、「Kになりたい」と連呼し次第に大きな声になる。しばらくすると冷静になり、＜Kになってどうする＞それは分からない。兄弟になりたいのだよ、Kが『逃走中』というテレビ番組でハンターから逃げるのだ。それで掴ってさ。そのことはお母さんたちには言わないで。「どういう名字にしようか」と将来の自分の名字を考えている。＜Kかな＞と大好きなKについて話すと「そういうことではないのだよ」と返してくる。

小考察

小学校へ行くようになった。校長や教頭、その後が気になっている。あの世に行きたい。Kになりたい入れ変わりたい。兄弟になりたい、名前を何にしようかな。自分の将来や名前を、自ら新たに形づけようとする。あたかもゲームのように自分の名字を変えたい等と自分の将来を設定する。あの世にいくことで、今の自分を変えることができると信じているようである。

中１、５、15

プレイルームに勢いよく入ってくる。帽子をかぶっている。髪がすっきりとしていることがわかる。「髪切った」と自ら報告する。＜短くなったな＞と返すと、＜何と言って切ったの＞「短く切って」と言った、「K、何と言っている」と聞いてくる。＜短くなったねと言っているよ＞俺、坊主になったな。めちゃめちゃ（髪の毛が）短い。

体育館で、ひとりで走ったよ＜先生と一緒じゃなかった＞先生は外で見ていた（しばらく・・・話が途絶える）。

俺の名前はH（小学校の時、同じクラスだった男の子の名前）だ。＜Kになりたいのではないか＞「この世ではHだ」と言う。あの世ではK。Kになりたい。＜どうして＞かわいい子になりたい。女になりたい。＜男なのにどうして女になりたい＞Kを妹にしたい。かわいいから。

小学校６年生の時の担任と会いたがる。

日常生活

学校では担任の先生の見守るなか体育館を一人で走ることができた。

小考察

「俺の名前はHだ」と意識が変化する。「この世ではHだ」と答える。Kが何を言っているかを聞きたい。＜男なのにどうして女になりたい＞との問いに対して返答はない。あの世ではKになりたい。かわいい子になりたいという明確に将来の姿を語る。小学校６年生の時は、外に出ることさえできなかったが、体育館で一人で走ることができたことを自慢げに報告したことは、今までとは違う行動がとれたことに対してA男が手ごたえを感じているように考えられた。

中１、６、12

帽子を深くかぶって、顔を隠し、ソファの上に寝転がる。頭をカバーで隠す。すぐに大きな声で「俺の名前はH（小学校の時、同じクラスだった男の子の名前）だ」と言いながらも、「Kになりたい」と繰り返す。俺の言っている学校にもかわいい子がいるよ、俺の名前はHだ、M先生（お気に入りの先生の名前）、「M先生」とお気に入りの先生の名前を繰り返す。「Kになりたい」と繰り返すので＜どうして＞と聞くと「かわいいから」、＜どっちになりたい＞Kだよ、Hは（今の）名前を変えているだけだよ、＜Kと兄弟になりたいな＞と繰り返す。朝青龍と言って、おなかをポンと叩く＜相撲するか＞「さ、気合を入れた・・・」と言うが急に『逃走中』とテレビ番組の話題に変える。

２年ぐらい前に「Rが死ね」と言って逃げたけど、＜思い出したのか＞、「いや、ずっと考えているよ」と言うが、大きな怒りはない。また、しばらくすると「俺の名前はHだ」と繰り返す。

「さんぽ（の曲）が・・・好きなんだよ」急に話し出すので話題について行けずに、尋ねると＜（トトロの）曲が好きだということ？＞、「さんぽが好きなんだ」、＜さんぽの曲が好きということ＞と聞き返す「聞いているのか」と怒鳴り、大きな声をあげる。お気に入りのトトロの曲の話しが出来ずイライラする。久しぶりにＴｈを怒鳴りつける。しばらく、ソファで横になり、床をドンドンと叩きつけている。

小考察

Kになりたい。「Hは（自分の）名前を変えているだけだよ」と言ってHのことを思い出す。２年前のことだけど興奮している様子はない。フラシュバック時に生じるような興奮の高まりは感じられない。相撲が好きで興味を強くもっている。特に朝青龍が好き。

中１、７、４

やわらかい表情でプレイルームに入ってくる。プ

レイルームに入ると「俺の名前はH（小学校の時、同じクラスだった男の子の名前）だ」と言う。それから「Kになりたい」、「Kになりたい」と続けて言う。学校の同じクラスにかわいい女の子がいる。かわいい女の子はRちゃん一人だけではないよ、頭にピンク色のもの、何かつけた子ども、誰か知りたいのだ、気になるのだよ。

大相撲のことが気になる相撲界のトラブルで「夏場所なくなるかな」と気になっている。朝青龍、強そうな名前だな、「Kになりたい」という気持ちが時々来るのだよ。

『逃走中』を見たよ。逃げ切ったよ。〇〇が捕まったよ、「〇〇が逃げ切ったよ」とテレビ番組の話題を出す。以前出演していたKがもう一度、出てくれないかな＜2回は出ないよ＞、Kが出てくれないかな、出てほしい。Kへの気持ちが高まったように見え、Kを「ペンペンと叩きたいな」と言う。

「Kになりたいよ」、「Kになりたいよ」ということを何度も繰り返しながら話す。女になりたい、＜男の方が強いのでは＞、弱くてもいいので、あー、女になれない、＜女になりたいのか、Kになりたいのか＞、女のKになりたい。

最近、ちょっかいをかけているお祖父さんとお婆さんとの言いあいを思い出し、真似て笑う。特にお祖父さんとの言いあいには大きな声をあげて笑う。

Thとはキャッチボールをする。普通にしっかりと投げることができるようになる。

日常生活

祖父と祖母をからかう行為が家庭で見られる。

小考察

『逃走中』、大相撲等のテレビの話題が出る。Kを「ペンペンと叩きたいな」と言う等、実際に関わりたい願望が生じる。学校で気になる女の子ができた。現実での関わりが増えてきた。

中1、7、18

ものすごい勢いで走ってくる。学校へ行けるようになって、好きな女の子が複数できた。

黒色のヘッドギアーをしたRさんという子、ピンクヘッドギアーの子がTちゃん、友だちのC君、好きな子が増えた、どっちがいいか分からなくなった。Kちゃん、かわいいな、かわいいよ。Kちゃんかわいいよ。まだ増えるかも。

水曜日に卒業した小学校の隣の支援学級のN先生が支援学校に見に来たって、N先生が言っていたって、将来、K（お気に入りの女性スポーツタレントの名前）になりたい、どっちになろうかな、「Kだったけど、T（学校のピンクヘッドギアーの子）になりたい」、「Kだったけど、R（学校の女の子）になりたい」と迷いが生じる。Hを妹にしようかな。自分がなって、妹にしようかな、Kもかわいいよ。かわいい子が3人も増えた。かわいい子が増えてしまい、どうしようと迷っている。

Thとキャッチボールをしながら話す。早い球を投げ込んでくる。Thが捕れない程の剛速球である。こちらが早く球を返すとすぐに返球する。しばらく、全力で投げ合う。

運動しているもん。プールに入っている。＜今日、プールあったの＞うん、あるよ、うん、あったりまえだよ。

M先生、D先生、先生の名前や友だちの先生の名前が数多く出てくる。丸坊主、森本、和田和博、小野伸二等のサッカー選手の名前や『必殺仕事人』に出ている役者の名前も出てくるが、Thが話についていけずに説明を求めても「知らないのか」と返す。その後も「『必殺仕事人』に出ているよ、敵を殺すやつ、必殺仕事人がいるよ」等の話を振られるがThはついていけない。

小考察

少しずつ学校生活のなかに溶け込んでいるような印象を受ける。現実の学校生活が豊かになってきたように感じられる。先生や興味のある子どもの名前が多く出てくるようになった。一時的ではあるが、この時、「〇〇先生」と言うようになった。

中1、7、24

「R」と大きな声で叫ぶ。＜気にいったのかな＞、「ああ」と返す。R（学校の女の子）、T（学校のピンクヘッドギアーの子）、K（お気に入りの女性スポーツタレントの名前）3人になりたい、「KとT」と誰になるかなと思っている。＜誰を妹にしたい＞と聞くと「なれない」、「なれない」と繰り返し、Thの反応がないとすぐに「聞いている？」と聞き返してくる。

「だかだかだかだか、くじろばば、だかだかだかだか、いないいない、パーラ、パー、いないいない」と歌う。＜何の歌＞、バスのなかでN君が歌っているよ、「デコボコフレンズ（NHK番組キャラクター）」と早口でN君が言う。N君がバスのなかで「早口で言っているよ」、「H、かわいいよ」と嬉しそう。

「だかだかだかだか、K、だかだかだかだか、いな

いいない」、「だかだかだかだか、だかだかだかだかいないいない」、「だかだかだかだか、朝青龍」、「だかだかだかだか、いないいない」と歌っている。

急に話題が変わり「N先生、８月に面接があるよ」と現実の話しに切り替わるが、また、「T（学校のピンクヘッドギアーの子）ちゃんはめちゃくちゃかわいいな」と言う。

キャッチボールをする。これも先回の続きで素早く取って投げ返す。自分が思うように取って投げられないと納得いかずくやしがる。

「白鴎、大鵬の記録に並んだね」と相撲には関心がある。「ねえ、Tちゃん」と急に言う。「前、相撲やったな、ピカチュウで」と３月にやった相撲を思い出す。＜相撲するか＞と誘い、Ｔｈがピカチュウを使って恐竜と相撲を取る。次は、それを見てA男がピカチュウと恐竜を戦わせる。相撲には関心を示すが、ＴｈがＳ君と相撲をとることを誘うと「いい」と断られる。

話題が切り替わり、「恥ずかしい」、＜何が恥ずかしい＞、「・・・」 ソファーでしばらく、静かになっている。

小考察

一緒に登下校のバスに乗っている子がいつも歌っている「デコボコフレンズ」に興味を示して、真似て歌ったり、自分の好きな女の子を登場させる替え歌を歌っている。Ｔｈ、A男の興味に沿い、ピカチューのぬいぐるみを使用して恐竜と相撲を取るとのってくる。そしてＴｈが相撲をすることを求めるが、それには乗ってこない。時々、学校のN先生の面接の話やテレビの相撲の話が出る。

中１、８、１

「Tになりたいな」、「Tちゃん、恥ずかしいよ」と言っている。でも、死んでないのでなれない、何でいけないのだよ、Kより良くなってきた、恥ずかしい、恥ずかしいよ、聞いているのか、＜聞いているよ＞と応える。「だかだかだかだか、くじろばば」と気に入っているお決まりの歌を歌う。

「早く、やろうよ」と言われてキャッチボールをする。素早く取って投げるルールにする。頭でヘディングしたり、やりとりのバリエーションが拡がる。早い球を投げたり、取りやすくゆっくりと投げたりする。Ｔｈが取れるように合わせてくれる。

おじいさん見て「ボーン、ボンボンボコン、ボンボンボコンボカン」と言って、お祖父さんを起こしたシーンを思い出して、笑っている。

小考察

死んだら、Tちゃんになれると信じている。プレイルームのやりとり、キャッチボールを自ら求める。自分なりに色々、投げ方を変えたり、Ｔｈが取りやすい球を投げてくれるようになる。Ｔｈに合わせて投げたことが印象に残った。自然に体が動き出している様子から１年前のソファーの上でカバーのなかに入り込んでいた状態と明らかに変わってきたと考えられた。

中１、９、11

帽子で顔を隠すこともなく、しっかりと目を合わせて入ってくる。しっかりとした足取りであるいている。

「だかだか、だかだか、くじろばば」と歌いながら今日は帽子ないよと言っている。浦崎先生に似ている人、高須クリニックの人、「たかだか、たかだか、いない、いない」とお気に入りの歌を何度も繰り返してうたう。「Hちゃんになりたい」、「見学会の時に、Hちゃんを見に行ってその机に座った」と嬉しそうに話す。

「東京ディズニーリゾートへ言ってきた。良かったよ」と楽しかったことを話てくれる。

「僕の血液型はO型なのだー」と急に話す。「たかだか、H」と替え歌を歌う。話をしては、歌い、話をしては、歌うことを繰り返している。

俺とC君ダブル朝青龍だ。俺が東で、C君が西だ、ダブル朝青龍だ。

東京ディズニーランドに行った時、かわいい女の子を見た、少し間が空いて、一番好きな先生、中学部の体育の先生、１年４組は社会の先生、学校では帽子かぶってないよ、＜どうして＞、恥ずかしくないもん、＜いつから＞、ずっと前から、もうすぐ運動会がある、僕、赤組み、Hちゃんは白組なんだ、敵なんだ、残念だ、敵になってしまったのだ、残念だ。

僕の名字はAになったんだ、Aという名字が大好きになったんだ、ぼく、M先生よりO先生が好きになった、O先生とよくしゃべるんだ、O先生が大好き、でO先生、僕を、‘あっ、みっけ’と言ってくれたんだ（ばったり会ったと時に）、N先生の出た高校知っているよ、O高校なんだって＜なんで好き＞、「かわいいから」と言ったかと思うと「僕N先生のことが嫌いなんだ」＜どうして＞「嫌いだから」と言う。

Ｔｈがキャッチボールに誘う。最初は話しに夢中

でのってこないが、そのうち、興味を示すようになる。次第にニコニコと表情が和らいでいく。以前のようにイライラした印象はなく、攻撃性や、急に「かっ」となるようなことも減ってきた。

日常生活

「見学会の時にＴちゃんを見に行ってその机に座った」と嬉しそうに話す。学校の先生が連れてくれている。学校では帽子を被っていない。好きな先生も出来た。

小考察

テレビのアイドルではなく、学校の女の子に関心が向いてきたり、自分でファンタジーのなかのストーリーを作っている。好きな名前を見つけたり、現実の学校の先生を好きになったり、興味のある安心できる人や世界が拡がっている印象を受ける。プレイルームにも帽子なしで来ることができた。キャッチボール等の誘いにも乗ってくるようになった。攻撃性を出すことも減り、柔らかくなったように感じる。学校へも帽子を被らずに過ごせるようになった。運動会にも当然、出るつもりでいる。Ｔｈへの関心も強くなったようで高須クリニックの先生に似ていると言うようになった。学校の先生のことを好きになったり、嫌いになったり、「○先生とよくしゃべるんだ」等と日常生活のなかで他者との関わりが増えて、他者への意識が強くなり、他者との関わりで感情が揺れ動かされていると考えられた。

中１、10、３

「Ｇ県に行ってきたよ」とＧ県の病院に行ってきた。血液型の話をしてきた等と報告する。「ＮさんとＴさんがムカつく」と担任の先生に対して言う。独り言を言っている。Ｋという名前を始めて出す。バカ殿の話しをする。

斎藤佑樹はプロ野球に入るのかな、僕はオールスター感謝祭を見た、Ｍ市ではゆうやけ、こやけが流れる、好きなのだ、僕は女が好きなんだ。「女になりたい」と話題が変わる。Ｅ（男子）は女が好きなのだ、Ｅも女になりたい、僕は大阪桐蔭高校、高校野球が好きなんだ、ダカダカ、Ｋ（アイドル）、いない、いない、「ダカダカ、ディズニーランド」と歌をうたっている。

日常生活

自分に指摘や指導をする先生にムカついている。

小考察

自分のことを「僕は・・・」と語ることが増えた気がする。「僕は女が好きなのだ」、「僕は女になりたい」等と言っている。

中１、10、23

元気よく歌をうたって入ってくる。以前のように顔を隠すことはなく。堂々と歩いている印象を受ける。身体も大分大きくなってどっしり感が出てきた。ゴールデンゴールズを見に行くと嬉しそうに教えてくれる。

かわいい女の子と男の子を見つけたんだ、Ｈちゃん、かわいいな、Ｉちゃんかわいいのか、「Ｉちゃん、かわいいな」とソファの上で横になって独りごとのように言う。浦崎先生、ぼく、Ｈちゃんになりたい、＜Ｈちゃんになりたいの＞、＜女の子でもいいの＞、「・・・」と応えなず、「たかたか・・・Ｈ、ばあばあ」と，替え歌をうたい出したかと思うと、「かわいいな、本当に」と好きな女の子のことを語る。

ＮＨＫの幼児番組、「いないいないばぁ」の歌をうたう。好きな野球のドラフト会議の話題を出す。斎藤佑樹が出るよ

俺の、俺の名前はきんご・・・、「イチローのちんちんは３個もある」と言って、自ら「ないよねー」という。

夢を見た（というが夢は語らず）Ｔちゃんになりたい・・・＜どうしてなりたいの＞「・・・」

ボールを手に取ったので、キャッチボールに誘う。ボールを投げるやりとりをした後、Ａ男はピッチャーで、Ｔｈはキャッチャーをする。ストライクゾーンに両手で構えている。ストライクの球だけを取って、ボールは取らないようにすると、ストライクをめがけて思い切り、投げ込んでくる。カウントをアウト、２アウト等と数えている。その遊びが楽しかったので、フォアボールになるとランナー１塁等とランナーを想定してキャッチボールをする。

中日がクライマックスシリーズに進出したことを話している。中日の先発ピッチャーの名前を覚えていて、１戦目は誰、２戦目は誰等と名前を挙げていく。落ち着いた会話になり、話しながらキャッチボールをする。

小考察

話題が野球の話題になったり、Ｈちゃんになりたいという話になったりする。落ち着いている時は話題が多いような気がする。キャッチボールのやりとりでは自分が野球選手になったようにＴｈのミットに投げ込んでくる。Ａ男の興味を現実のプレイルームのやりとりで満たすようにする。キャッチボールはストライク、ボールのジャッチに興味を持たせ、

分かりやすくするため、ストライクは取って、ボールは取らないようすると、ボールの場合はＴｈは身体で受け止めることにすると、それがおもしろいようで真剣に投げ込んでいるようであった。興味が移り変わり易さがあるＡ男であるが、いつもに増してやりとりが継続された。野球の話題とキャッチボールが重なり力が抜けたバランスのある相互性を帯びた会話になったように感じられた。

中１、10、31

入ってくるやいなや、好きな女の子の名前を言う。ソファで横になってカバーで顔を覆いながら言い続ける。２分ぐらいたってから、「ドラフト会議があったね」、「斎藤佑樹が出たね」と好きな野球の話しに変わる。

キャッチボールにＴｈから誘ってキャッチボールをする。いつものボールを見つけて、Ｓに投げる。キャッチボールを始める。Ｔｈが座って構えど真ん中のストライクに両手を重ねて構え、構えた両手に投げられたストライク以外は取らないことを約束する。Ｔｈがキャッチャーをして Ａ男がピッチャーになる。ボールになるとＴｈの身体に当たったり、顔に当たったりする。身体に当たり、Ｔｈが痛がるのを見て、楽しそうに笑う。

「Ｔ先生とキャッチボールしたよ」＜Ｎ先生とはした＞「しなかった」、＜Ｔ先生は好き＞「まあ」、＜Ｎ先生は＞「ムカつくときがある」と学校の話題が出る。

今日は「私はバカ殿です」、＜誰が言ったの＞、「自分で言った」等と初めて聞く話を聞いた。

小考察

現実的な野球のドラフトの話をする。野球には以前から興味は高い。プレイルームでキャッチボールの話をしている時に現実的な話題へと繋がる。ボールが身体に当たり、Ｔｈが痛がるのを見て、楽しそうに笑う。

中１、１、８

ソファーでカバーを頭から下半身までかける。手で下半身をモサモサと動かしている。股間に触れているようだが隠している。＜何をしているか＞と聞いても、ニタッと笑っている。

東京に行きたいな、＜どこへ行きたい＞、東京タワーに昇りたい。ちんちんが三個ある。Ｋちゃんのちんちんが三個あるよ。2011年だな。＜今年はどういう年になるかな＞、＜したいことある＞、ちんちん、Ｋちゃんのちんちんは３個ある、ドラえもん、ドラえもん、ドラえもんがいる、こころのなかにいつも描いているドラえもん。僕、ドラえもん。東京行きたいな、＜東京タワーか＞、東京タワーに昇りたい。赤い光を見てみたい。

＜学校はどう＞、・・・＜Ｎ先生とか＞、Ｎ先生、Ｔ先生むかつくし。Ｈ教頭先生むかつく、＜どうして＞・・・(聞かれたから応えている)。

俺のかわいいと思っている女いるよ。Ｋちゃんはかわいいと思っている。

＜学校はどう＞、だからムカつくって、＜何がムカつく＞・・・。学校は始業式だったよ（特に怒りは感じない。しかししばらくして）むかつくということを繰り返す。教頭先生がむかつくと言っている(具体的に何にむかつくかを話さない)。

Ｔ先生は机の上に乗るなとか、言うからむかつく。教頭先生もむかつく＜机の上には乗ってはいけないと言われることが嫌なのかな＞ＫＴちゃんとかむかつく。

小考察

東京タワーに昇りたいと現実的な願いを持っている。学校に対して質問すると、それに応えてくれる。Ｎ先生、Ｔ先生むかつくし。Ｈ教頭先生むかつく等と現実の他者への不満が出てくる。その理由は注意や指示されることへの抵抗が強く、理由を聞いても応えられない。なぜ注意されるのか。その注意の内容や適切な対応の理解についての語りはない。学校でも対応をしていると思われるが、本人のなかにむかつくという感情が強く残っている印象を受ける。現実との関わりが増えることで先生に対してもむかつく気持ちが出てくる。

中１、１、30

ソファーに入ってカバーを頭から被る。「あっ、チンチン」と言って、「あっ、言ってしまった」といけない発言だと確認することを数回繰り返す。「あっ、おまたの・・・」と言っては、「あっ、・・・」といけない発言を確認する。注意される発言をわざと繰り返しているようで、笑っている。

ふと思い出したかのように、あっ、病院に行った時の帰りのレストランの店員に「かわいいねと言った」と教えてくれる。誰に似ているかという話しになる。Ｋとはちょっと違った。それからサッカーの話題となり「本田慶介とロンブーの亮」と似ているという話しになる。

小考察

誰と誰の顔が似ている等、他者の顔をよく見ている印象を受ける。性的な発言を出しては自ら、故意にブレーキをかけている。店の店員に「かわいいね」と声をかけるようになり、外への抵抗が和らいでいる。本田慶介とロンブーの亮が似ている等、他者の顔をよく見ていることが考えられる。ひきこもって外界に顔を出せなかった時に比べると大きな変化が見られた。

中1、2、27

いつものように走って部屋に入ってくる。好きな女の子の名前を叫んでいる。「俺、○○ちゃん好きなんだな」と言っている。

大きな声で「ごーすいん、ごーすいん・・・」と繰り返しているがよく分からない。「タレントKは、そーいうこと言っていたらダメだよ」、「そーいうこと言ったらダメだよ」と同じフレーズを繰り返している。

キャッチボールをする。ボールを天井に当てて「わざとだな」と言う。そして、それを真似て自分も「わざとだな」と返してくる。

1人二役で独り言を言っている。「何か分かる」とThに聞いてくる。ルパンvsコナン等と言っている。独り言を繰り返している。名前を繰り返している。「あーそーか、君が・・・」、「おじさん、そんな悪い人に見えないけど・・・」、「残念だったね、ビデオカメラだったの」と独り言で二役を繰り返している。

頭がかゆくなりものすごい勢いで掻いている。

小考察

珍しくアニメの世界に入って一人二役のセリフを繰り返している。Thとのキャッチボール、何をやっているか分かるというふうに聞いてくる。独りの世界に浸りながらもThを意識していることが分かる。

中1、3、20

「Iちゃんになりたい、ピアピアゴ」<どうしてなりたい>「かわいいから」「どんなIちゃんになりたいかな」と小さな声で言うので、しばらくして<どんなIちゃんになりたいか>聞いてみる。「身長は・・・」等と考えている。天国に行ってIちゃんになり、どのようなIちゃんになるかを想像して楽しんでいる。

「ちんこ、だすぞー」と言って「あっ、いった」と言う。「M（語尾に先生をつけない）さんがいる、Mさんがいる」と言って「M先生」といつも注意されているように自分で指摘する。「Tさんがいる」、「Tさんがいる」と言っては「T先生」とさんづけを先生とをつけて呼ぶことに自ら訂正することを繰り返して楽しんでいる。

小考察

天国に行ってIちゃんになりたいことについて、具体的に考えている。自分の意図していることを指摘されることに対しては被害感を抱かない。むしろ意図的に発言して、予定通り指摘されることを楽しんでいる。

特別支援学校中学部2年生、4、2

ソファーカバーを頭から被って、家から持ってきたIちゃんの写真の載っている文集を見ながら、「Iちゃんになりたい」と言っている。「ボンボンボコン、ボボン」と歌いながら笑っている。文集を見ながら「あっ、チンコ触った」と言ってIちゃんの写真を見せる。Thが<それはいけないな>と注意すると止める。

「Iちゃん、Iちゃん」といつものように甘い声で言う。斎藤佑樹とダルビッシュの名前を叫ぶ。Iちゃんの名前を叫ぶ。

「おじいちゃんを見て、ボンボンボコンボコン」、「おじいちゃんを見て、ボンボンボコンボコン」と話をしている。「おじいちゃんの変な顔を笑えておもしろいな」と思い出して、グリーンのキセキの替え歌を歌う。「あした今日よりも、チンポ出せる、みんなチンポ出した、みんなでチンポ・・・ウンコ出して・・・キセキ」、「あっ、言った（チンコと言ってしまった）」と歌を止める。

小考察

性的な関心は強くなっているが、周りの反応を楽しんでいるようである。性に関連した替え歌で楽しんでいるように見える。

中2、4、16

「担任の先生変わったよ」、「教頭先生が変わったよ」等と現実的な学校の話しをする。お気に入りのIちゃんになりたいと話す。そして理想のIちゃんの姿を描く。<どういう姿>、身長が高くて先生をやっていて、ヘッドギアを被ってない等と理想の姿について語る。「Iちゃんになりたい、なれーん（なれない）」とお決まりのフレーズを叫ぶ。「なれねー」と叫ぶ。先生に注意されたやりとりの言葉を繰り返

す。「もう待てねー、Ｉちゃんになりたい」と叫ぶ。

小考察

現実的な学校の話をする一方で、理想の願望としてのＩちゃんの姿を具体的に思い描いているように考えられた。不安定な時に不安が大きくなり、理想を求める時と、安定している時に理想の願望を描く時の違いを感じる。不安的な時は自分の存在を規定するすべてのことが気になりだす。今の自分を変えなければいけないという切迫感があるが、安定している時は、夢を描くように、「将来なりたい自分」を思い描くように自己存在を規定しているように考えられる。

中２、５、１

「Ｉちゃんになりたい、なりたい、なれーん」と一連のフレーズを大きな声で叫ぶ、「Ｍさん」、「Ｍさん」と自分の担任の名前を連呼する。

理想の自分の姿を語る。妹になって兄弟になって身体が大きくて、先生やっていて、髪の毛の長さが普通で、妹は丈夫な子で、お兄ちゃんは妹の足さわったりとか、上に乗ったりする。変態なことをしたり、雰囲気とかはね、分からない。お父さんは神様みたいになってほしいなと思う。神様はお父さん、家族はお父さんと妹に子どもがいて、＜お母さんは＞いなくて。妹にもだんなさんがいない＜どうしていない＞必要ないから、Ｉちゃん、Ｒさん（先生）とか、誰を妹にしようかと思ってしまう。不安がある。

妹に先生をやってほしい、妹は先生やっている方がいい。天国の神様が思ったようにどうにかしてほしい、＜天国の神様は誰？＞分からん、まだ決まっていない、天国の神様がどうにかしてほしい。Ｉちゃん、Ｉちゃん、先生やっている妹がいいな、なりたい、なりたい、なれーん、Ｉちゃん、Ｉちゃん。

股間をさわっている。指摘すると「あっ」と言って「触っていると大きくなる」＜なんでだろう＞わからんけどな・・・。自分で「ちんこ叩こうとしたら、キンタマ叩いたわ、痛い」と騒いでいる。

「ドラゴンズ負けすぎだろう」と現実の話をする。「Ｓ君、何にもできない子、学校に来てない子や、学校に来れないのや」と学校の話をする。

小考察

自分が描く不安を解消するための将来の家族の設定を上手くたてることができない。その設定が上手く立てられないと苦しい。「妹は強くあってほしいようで、身体は大きくて、先生やっていて、髪の毛の長さは普通で、丈夫な子」という理想のイメージをもっている。「妹は先生をやっていて欲しい」等と自分の親が先生であることと関連があるのであろうか。性への関心も高く、股間を手で触れている。

中２、５、29

ソファカバーの中に入って独り言を言っている。写真の入った文集を見て、「Ｉちゃんになりたい」、「妹になりたい」と繰り返す。自分からＴｈの方に寄ってきて、「こちょ、こちょ」と言って脇の下に触れようとする（このようなことは珍しい）が、実際にやりかけて止める。対人接触への抵抗が弱まってきたような印象を受ける。

性的な発言をしては自分で「あっ、言っちゃった」と言うことを繰り返す。「おちん・・」と言いかけては、「あっ、あぶなかった」と自分で自分に言い聞かせている。

日常生活

学校でも担任の先生と身体を「こちょ、こちょ」とくすぐりあっている。

小考察

自ら性的な発言をしてはブレーキをかけている。特別支援学校に入学して、Ａ男の世界が外へと開かれていると感じられる。他者との関わりにおいても、プレイルームでも学校でも、身体に触れてやりとりを求めてくることは大きな変化として考えられる。

中２、６、12

ソファに横になりカバーを被り、文集のＩちゃんの写真を見る。じっと見て、「かわいいな」と繰り返す。

キャッチボールをする。チェンとか、吉見とか、田中正博、佑君、ダルビッシュなどと言っている。Ｔｈはキャッチャー、ピッチャーはＡ男、ストライクカウントを数えながら投げている。コントロールは良い。

それが終わると、話し出す。ひとりだけの世界がいいということ。妹に色々なテレビ、ニュースを見させたい、そして色々なＣＭに出てもらいたい。妹の顔はＫとＩちゃんの合わせた顔にしたい。「まーちばら、まちばら」、「うらさき、うらさき、ピアビアゴ」、しばらくして「Ｉちゃんのおっ・・・。」と繰り返す。

学校での話をする。中３年生のクラスの違う子と遊んだ。運動会だったけれど遊んだ。＜何して遊んだ＞何か投げたりして、雨に濡れたりして遊んだ。

時々、手でズボンのなかの性器に触れるがＴｈが指摘すると、「あっ」と言って、手を抜き、やってはいけない行為として止める。

Ｔｈに寄ってきて、１、２度、「こちょ、こちょ」と触れる。

小考察

学校の運動会で遊んだことを話す。何かを投げたり、雨に塗れたり等活動的になってきた印象を受ける。Ａ男にとっても話たくなる手ごたえのある体験になっていたと考えられる。

中２、６、26

いつも使い込んで破れている特別支援学校の文集を持ってきて、載っている好きな子の写真を見ながら、「あっ、チュウっした」と言っている。「Ｉちゃんのおっ」、「Ｉちゃんのおしっこのむ・・・言っちゃった」、「Ｉちゃんのおしっこ・・・言っちゃた」と言っている。手でくすぐり始める。肩や瞬きのチックが出ている。

あの世のＩちゃんの設定が、上手くまとまらないようで、あの世の天国に自分は行けるのか、神様になりたいと母親に行っている。

日常生活

Ｉちゃんの文集を普段でも持ち歩いている。

小考察

あの世に行けるのかと不安になっていることと肩や瞬きのチック症状が出ていることの関連性が考えられた。好きな子の写真が載っている文集を持ち歩いて見ている。

中２、７、10

Ｉちゃん、妹ちゃん、Ｗ先生、Ｒ先生、かわいい先生いっぱい、かわいい男の子みつけた、＜どうして男＞、・・・、誰を妹にするか、迷ってきた、「Ｓちゃん（Ｓ先生）を妹にしようかな」と言う。「Ｓちゃんもかわいいからな」と迷っている。

キャッチボールをする。Thの股間をめがけて投げてくる。変化球を投げるよう求めてくる。落ち着いていて、Ｉちゃんのことより、かわいいＳ先生の名前が多かった。

小考察

かわいいお気に入りの子が増えて誰を妹にしたらいいのか、迷っている。迷っている様子は何か幸せそうな印象を受ける。自分の夢を描くようである。Ｔｈの股間にボールを投げ込んでくる。

中２、９、11

「Ｉちゃん、Ｉちゃん、ふぁっ、ふあっ、ふぁっ」と歌っている。久しぶりに会う。髪の毛は丸刈り。「高等部の女の子が死んだ、お母さんも死んだ自殺だって」、時々股間に手をもっていき、Ｔｈの目を避けるように触れている。＜何している＞と聞くと隠そうとするが、「かゆい」と応える。

キャッチボールをする。本人が投げ込んでくる。球も早くなった。「高校野球を見た」と聞いてくる。＜見てない＞と応える。今まで期待に沿わないとイライラしている時もあったが、そうかと、受け止めがよくなった。

小考察

Ｔｈが期待した通りの反応を返すことができなくても苛立ちを表すことが少なくなった。

中２、9，24

キャッチボールをする。Thの急所をめがけて投げてくる。それがとても楽しい様子でニコニコしている。少し投げる間を開けては、「Ｓちゃん、Ｉちゃんふわ、はわ、ふわっと・・・」とリズミカルに口癖のように繰り返す。

小考察

Ｔｈとのキャッチボールも股間をめがけてくるが、ニコニコと楽しそう。性的な行動が問題化するようには見えない。お気に入りの子がフレーズに出てくる。嬉しそうに歌っている。

中２、10、10

口ずさんでいる、歌を当てると、すごい、よく知っているな・・・。「俺は食べるのよりも音楽に集中しているんだな」と説明する。Ｉちゃんになりたいな～、キャッチボールではＴｈの急所をめがけてボールを投げ込んでくる。Ｈは俺のライバルだ、それは俺の敵、俺はＲでＨははごろもぎつね、そういう話を作った。「バーカールコー」という新しい言葉に興味を示し繰り返している。「Ｉちゃん～」と急に叫び「なりたいよ」と言う。

小考察

自作の世界を作るようになった。自分なりの設定があり、自分の興味のあるストーリーや言葉を使っている。

中２、10、22

「Ｉちゃん、ふわっ、ふわっ」とお気に入りの自作の歌を歌っている。キャッチボールを学校でやっ

ていることを教えてくれる。Thにキャッチボールを求めてくる。

「そういうことをしてはいけません。おしっこするぞー」と何かを思い出しながら言っている様子。姉のＹちゃん、イルカの人形見せて（見立てて）「ちんこ」と言ってバットをおちんちんに見立てている。

日常生活

学校でよく担任の先生とキャッチボールをやっている。おしっこやちんこ等性的なことへの関心が日に日に高まっている印象を受ける。

小考察

秋になって「不安だ」とよく言っている。母親は季節の影響があるのではと言っている。

中２、10、30

いつものようにソファのカバーを被っている話をする。不安だ。Ｉちゃんの妹になりたい。Ｉちゃんふぁっ。妹になりたい、「くそっ、なれん～」と連呼している。

妹なりたい、かわいい男の子について話す。おちんちんもなく、きんたまもない、胸が膨らんでいる子、＜かわいい男の子になりたいの＞、運動会の時に見た、かわいい男の子

日常生活

学校でも人をよく見ている。

小考察

「男の子になりたい」と言っているが、「おちんちんもなく、きんたまもない、胸が膨らんでいる子」と言っていることから考えると、女の子のイメージである。

中２、11、３

気にいっているイルカを家からもってくる。手に持っていてたまに「いるかちゃん」等と言う。相談室に同じくイルカ（ぬいぐるみ）がいることを伝えると、それを集めて、向かい合わせでいる。ミニチュアのイルカを差し出すと、それはいいと拒否された。

＜（小学校３年生の時の）このイルカ、覚えている？＞と尋ねるときょとんとした表情。使っていたことを忘れているようであった。ぬいぐるみのイルカに「きんたまがついている」等と話しているが、実際はついていない。

キャッチボールをする。プロ野球選手の真似をする。Ｔｈも真似をしながらキャッチボールをする。顔を真似るとＡ男も大きな口をあけて「田中将大」の真似をする。

小考察

テレビで野球選手の顔をしっかりと見ているのだなと感心した。

中２、11、13

イルカのぬいぐるみを家から連れてくる。Ｉちゃんの「きんたまたまたま」と言って、自ら口を止める。「Ｉちゃんのおしっこ飲むんだよ」、「Ｉちゃんのおしっこ飲むんだよ」と言うと「あっ、言っちゃった」。「Ｉちゃんのきんたま、たま、たま」と言った後に「あっ」と口を止める。

「Yちゃん（姉の名前）、Ｙちゃん、一緒に遊びましょう」とイルカが誘っている。お姉ちゃんの名前だけど、「お姉さんはいない」と言っている。かわいい、男の子のおしっこを飲む、かわいい、男の子のおしっこを飲むと繰り返す。

日常生活

家のイルカのぬいぐるみを外出の時によく持ち歩くようになった。

小考察

以前よりも言ってはいけない言葉を連発するようになった。異性ではなく、「かわいい、男の子のおしっこを飲む」等と繰り返している。以前のようにイルカをもってくる。お姉さんとイルカを使ってやりとりをする。プレイルームでは、はっきりと性的な表現を発する。

表４．他者との関係性と不安・願望、興味・関心の変容過程

	特徴的な行動	他者との関係性 （プレイルームでの関わり）	不安・願望（将来に関する願い）についてのプレイルームでの語り	興味・関心 （日常生活）
3	•（Kの写真を見て）足が見えるな、恥ずかしいなと繰り返す。	•２つのぬいぐるみで紙相撲をするように向かい合わせて立たせて、カーペットを揺らして相撲をして見せる。		•白鴎、把瑠都等の名前を覚えている
5	•帽子をかぶってプレイルームに入ってくる。髪を短く切ったことを報告する。		•卒業した小学校の校長、教頭がどのような人か気になる。「Ｆという名字だ」とＴｈに報告する。 •あの世に行ってＫになりたい、Ｋの兄弟になりたい。 •どういう名字にしようかと将来の名字を考えている。 •俺の名前はＨ（クラスにいる男の子の名前）だ＜Ｋになりたいのではないか＞この世ではＨだ。	•小学校のことが気になっていて「好きだから行ってきた」とＴｈに報告する。 •学校では担任の先生が見守るなか体育館で一人で走ることができた。
6	•Ａ男のさんぽの曲が好きだという話題をＴｈが上手くくみ取れず何度も聞き返すと苛立ち怒鳴る。		•＜（ＫとＲ）どっちになりたい＞「Ｋだよ」「Ｈは（今の）名前を変えているだけだよ」＜Ｋと兄弟になりたいな＞と繰り返す。 •２年ぐらい前に、「Ｈが死ね」と言って、逃げたけど＜思い出したのか＞「いや、ずっと考えているよ」と言うが、大きな怒りはない。	•大相撲、特に朝青龍に興味をもっている
7		•Ｔｈとキャッチボールをしながら話す。Ｔｈが捕れない程の剛速球を投げてくる。Ｔｈが早く球を投げ返すとすぐに返球する。全力で投げ合う。 •Ａ男が３月にぬいぐるみで相撲を取ったことを思い出したので、誘ってみるとＴｈがピカチュウを使い、恐竜と相撲を取る。次は、それを見てＡ男がピカチュウと恐竜を戦わせる。相撲には関心を示すがＴｈがＳ君と実際に相撲をとることを誘うと「いい」と断られる。	•好きな女の子が増えて、将来になりたい自分にも迷いが生じる。	•運動したり、プールに入ることもできるようになった。＜今日、プールあったの＞。「うん、あるよ、あったりまえだよ」との発言が見られた。 •学校の同じクラスにかわいい女の子ができる。かわいい女の子は一人だけではなく、気になり出す。どちらがいいか迷いが生じる。 •バスのなかでＮ君が歌っている歌を頻繁に口ずさむ。

8		•「早く、やろうよ」と言われてキャッチボールをする。素早く取って投げるルールにする。頭でヘディングしたり、やりとりのバリエーションが拡がる。早い球を投げたり取りやすくゆっくりと投げたりする。Ｔｈが取れるように合わせてくれる。	•「Ｔちゃんになりたい」でも「死んでないのでなれない」と死んだらＴちゃんになれると強く信じている。	
9	•帽子で顔を隠すこともなく、しっかりと目を合わせて入ってくる。しっかりとした足取りで歩いている。	•浦崎先生は高須クリニックの人に似ている。 •キャッチボールに誘う。最初は話しに夢中でのってこないが、そのうち、興味を示すようになる。次第にニコニコと表情がや和らいでいる。以前のようにイライラした印象はなく、急に「かっ」と攻撃性を向けるようなことも減ってきた。	•僕の名字はＭになったんだ、Ｍという名字が大好きになったんだ	•学校でも帽子を被っていない。＜どうして＞、恥ずかしくないもん •俺とＣ君ダブル朝青龍だ。俺が東で、Ｃ君が西だ、ダブル朝青龍だ。 •一番好きな先生、中学部の体育の先生
10		•好きな野球を通したキャッチボールには乗ってくる。キャッチボールの間は落ち着いた会話になる。やりとりが単調にならないように、ストライクの球だけを取って、ボールは取らないようにすると、必死にストライクをめがけて思い切り、投げ込んでくる。ストライクが外れるとボールがＴｈの身体に当たることになる。Ｔｈが痛がるのを見て、楽しそうに笑う。カウントをアウト、２アウト等と数えている。その遊びが楽しかったので、フォアボールになるとランナー１塁等とランナーを想定してキャッチボールをする。	•僕は女が好きなんだ、女になりたい	•自分に指摘や指導をする先生にムカついている。 •「Ｔ先生とキャッチボールしたよ」＜Ｎ先生とはした＞「しなかった」、＜Ｔ先生は好き＞「まあ」、＜Ｎ先生は＞「ムカつくときがある」と学校の話題が出る。 •僕は大阪桐蔭高校、高校野球が好きなんだ •「イチローのちんちんは３個もある」と性的な発言が出る。 •「ドラフト会議があったね」、「斎藤佑樹が出たね」と好きな野球の話をする。特に中日の先発ピッチャーの名前を覚えいて1戦目は誰、２戦目は誰と名前を挙げていく。

1	•性的な注意されるような発言をわざと繰り返しているようで、笑っている。 •病院に行った時の帰りのレストランの店員に「かわいいね」と言ったと自ら報告する。		•ドラえもんがいる、こころのなかにいつも描いているドラえもん。僕、ドラえもん。東京行きたいな、<東京タワーか>、東京タワーに昇りたい。赤い光を見てみたい。	•N先生、T先生むかつくし。H教頭むかつく。 •T先生は机の上に乗るなとか、言うからむかつく。教頭先生もむかつく •サッカーの話題となり「本田慶介とロンブーの亮」と似ているという話になる。他者の顔をよく見ている。
2		•キャッチボールをする。ボールを天井に当てて、「わざとだな」と言う。そして、それを真似て自分も「わざとだな」と返してくる。「何か分かる」とＴｈに聞いてくる。ルパン vs コナン等と言っている。独り言を繰り返している。名前を繰り返している。「あーそーか、君が・・・」、「おじさん、そんな悪い人に見えないけど・・・」、「残念だったね、ビデオカメラだったの」と独り言で二役を繰り返している。		
3			•「どんなＩちゃんになりたいかな」と小さな声で言う。<どんなＩちゃんになりたいか>「身長は・・・」等と考えている。天国に行ってどのようなＩちゃんになるかを想像して楽しんでいる。	
4	•おじいちゃんの変な顔を笑えておもしろいな	•あした・・・今日よりも・・・チンコ・・・みんなでチンコを出して・・・、ウンコ出して・・・キセキ、「あっ、言った（チンコと言ってしまった）」と歌を止める。	•お気に入りのＩちゃんになりたいと話し、理想のＩちゃんの姿を描く。<どういう姿>、身長が高くて先生をやっていて、ヘッドギアを被ってない等と理想の姿について語る。	•「担任の先生変わったよ」、「教頭先生が変わったよ」等と現実的な学校の話しをする。 •持ってきたＩちゃんの文集に載っている写真を見ながら「あっ、チンコ触った」、Ｔｈが<それはいけないな>と注意すると止める。

5	•「おちん・・」と言いかけては、「あっ、あぶなかった」と自分で自分に言い聞かせている。性的な発言を抑制している。 •ソファカバーの中に入って独り言を言っている。写真の入った文集を見て、「Ｉちゃんになりたい」、「妹になりたい」と繰り返す。	•自分からＴｈの方に寄ってきて、「こちょ、こちょ」と言って脇の下に触れようとする（このようなことは珍しい）が、実際にやりかけて止める。対人接触への抵抗が弱まってきたような印象を受ける。	•「妹になって兄弟になって身体が大きくて、先生やっていて、髪の毛の長さが普通で、妹は丈夫な子で、お兄ちゃんは妹の足さわったりとか、上に乗ったりする。変態なことをしたり、雰囲気とかはね、分からない。お父さんは神様みたいになってほしいなと思う。神様はお父さん、家族はお父さんと妹に子どもがいて」と自分のイメージする妹像を語る。	•学校でも担任の先生と身体を「こちょ、こちょ」とくすぐりあっている。 •学校でも担任の先生と身体を「こちょ、こちょ」とくすぐりあっている。
6	•肩や瞬きのチックが出ている。 •好きな子の写真が載っている文集を持ち歩いて見ている		•妹に色々なテレビ、ニュースを見させたい、そして色々なCMに出てもらいたい。妹の顔はＫとＩちゃんの合わせた顔にしたい。 •あの世の天国に自分は行けるのか、神様になりたいと母親に話す。	•中学３年生のクラスの違う子と遊んだ。運動会だったけれど遊んだ。＜何して遊んだ＞何か投げたりして、雨に濡れたりして遊んだ。
7		•Ｔｈの股間をめがけて投げてくる。変化球を投げるよう求めてくる。	•W先生、Ｒ先生、かわいい先生いっぱい、かわいい男の子みつけた＜どうして男＞、誰を妹にするか、迷ってきた、「Ｓちゃんもかわいいからな」と迷っている。	
9	•時々股間に手をもっていき、Ｔｈの目を避けるように触れている。			•「高等部の女の子が死んだ、お母さんも死んだ自殺だって」と話す。
10		•イルカの人形を見せて(見立てて)「ちんこ」と言ってバットをおちんちんに見立てている。		•学校でよく担任の先生とキャッチボールをやっている •Ｈは「俺のライバルだ」、それは俺の敵、俺はＲでＨははごろもぎつね、そういう話を作った。

11				•家のイルカのぬいぐるみを外出の時によく持ち歩くようになった。 •「Yちゃん（姉の名前）、Yちゃん、一緒に遊びましょう」とイルカが誘っている。

Ⅳ．考　察

1．不安と願望

A男は将来の自分の姿を思い描き、理想の自分を設定しているようである。自分の生まれた時につけられ、その名前で生きてきた自分の歴史性を規定する名前を変えることを望む。簡単に名前が変えられるものであるという表面的な感覚と、別の他者になりたいという願いが感じられる。「この世はH」、「あの世ではK」と、こちらとあの世の自分を別々に設定している（中１、５月）。「かわいい子」になりたいという思いは明確でぶれることはない。A男は現実では小学校の友達Hと名前を名乗る。それは今、変えているだけと言ったり（中１、６月）、「僕の名字はAになったんだ」、「Aという名字が好きなんだ」（中1, 9月）と現実に簡単に名字を変える側面と、「死んでないのでなれない」という「あの世」でKになれるかどうか定かではないという深刻で切実な願いが伝わる（中１、８月）。現実の「この世」で名字を変えようとする時は「一番好きな先生、中学部の体育の先生」、「僕N先生のことが嫌いなんだ」（中１、９、11）のように他者への興味や関心が強くなっていることが考えられる。「この世」ではお気に入りの他者の名字に用意に入れ替わって自分を重ねながら安定を保っていると考えられる。「あの世」に求める自分の姿は永遠の自分の安定を求めているように感じられる。

好きな他者には「かわいいから」と好きな理由を語る。実際に好きになる人物はA男を決して脅かすことのない心地よさを与える他者という印象を受ける。そして「僕は女が好きなんだ、女になりたい」と好きな対象になりたいと言う（中１、10月）。好きな対象は中学１年３月には、それまで好きだったタレントのKではなく、現実に学校に存在するIちゃんを好きになり、そのＩちゃんになれることを望むようになる等の変化が見られる。

そして中２の５月には「Ｉちゃんの妹になって、兄弟になって、身体が大きくて、先生やっていて、髪の毛の長さが普通」、中２の６月には「妹に色々なテレビ、ニュースを見させたい、そして色々なCMに出てもらいたい。妹の顔はKとＩちゃんの合わせた顔にしたい」と語り、将来、なりたい理想の姿が具体的になっていった。「お父さんは神様みたいになってほしい」等と天国に行った時の家族のイメージを語る。６月には「あの世」に自分がいけるのか、神様になりたい等の発言が見られる。同じく６月には肩や瞬きのチックが見られるようになる。７月には「かわいい」と思う先生や好きな子どもが増える一方で、「誰を妹にするか、迷ってきた」との発言等から、将来、天国でなりたい対象像が定まらなくなり困惑している様子が示唆された。

2．学校生活・日常生活

特別支援学校の中学部には入学式以降、休まずに通うことができ、環境が変わることが与える影響の大きさを感じた。中１、５月の上旬に卒業した学校が気になり、実際に校長と教頭に合いに行く、フラッシュバック等の外傷体験の影響は薄れ、むしろ積極的である。どのような人が新しい校長と教頭になっているか、Fという同じ名字であることが印象に残ったようである。その後、担任に見守られるなか、体育館を走りまわる等の少しずつ外へ出る行動が見られた（中１、５月）。

学校での対応はA男が周囲の子どもたちの目に晒されないように目隠しのための薄いカーテンで教室の隅を囲んで、そのなかに机を置くようにする等教室の構造作りに工夫を凝らしていた。学校へ通えるようになることで安定した居場所と安心できる他者を得ることができたようであり、外界への動きが生まれてきたように考えられた。

プールに入るようになったり、気になる女の子が増えたり、バスのなかで歌を歌っている生徒の歌に興味を示し真似て歌ったり（中１、７月）、中１、９月になると帽子で顔を隠すことなく登校できるよう

になった。中１の10月になると女の子に限らず、「一番好きな先生、中学部の体育の先生」と自ら発言し、学校でキャッチボールをするようになる等の具体的な関わりが生まれる。一方、机の上に乗ると注意する女の先生はムカつくと抵抗を示している（中１、１月)。中１の１月にはレストランの店員に「かわいいね」と声をかけられるようになり他者や外へ出ることの抵抗が少なくなっていった。

他者への意識が高くなり他者の行動を真似るようになったり、やりとりが見られるようになった。中２の５月には担任の男性の先生とも相性が合い、身体へのくすぐり遊びをするようになった。小学校１，２年の時のように自然な担任との関わりによる快体験と重なる体験として考えられた。

３．興味・関心

思春期と性への意識が高まってくる。小学６年生の頃には、大好きな女性タレントＫの写真、足を見ている。性への意識が芽生えている。先生を困らせて喜んでいる。好きなタレントの足を見て「はずかしい」と言う言葉をしきりに使うことが見られた(小６、３月)。好きな女の子が増えるという、思春期的な異性への関心と将来、自分がお気に入りのＫやＩちゃんになりたいという願いが強い。中１の１月には注意されるような性的な発言が増えている。「あした・・・今日よりも・・・チンコ・・・みんなでチンコを出して・・・、ウンコ出して・・・キセキ」等とGReeeeNの『キセキ』の替え歌を歌ったりしている。その性的な関心は周りの他者への関心を高めるとともに、他者からの反応を引き出す言葉にもなっていると考えられた。中２の５月には・「おちん・・」と言いかけては「あっ、あぶなかった」と自分で自分に言い聞かせ性的な発言を抑える場面があった。中２の９月には、プレイルームで筆者に見られないように股間に触れる等の行動が見られ、本児なりに性的な発言をして楽しんだり、時には抑制したりしていることが見られた。

４．フラッシュバック

卒業した小学校の校長、教頭がどのような人か気になり実際に学校へ行ってくる。その理由を本児は「好きだから行ってきた」、「Ｆという名字だ」と語った（中１、５月)。小学校で、そのＨに「死ね」と言われて逃げたことを話すが「ずっと考えている」と語るが怒りや興奮はないようであった（中１、６月)。特別支援学校へ変わり、学校生活を送ることによって安定感が生まれてきたように思う。学校生活での行動範囲が拡がり、他者との快の体験が増えるにつれて、小学校の時の外傷体験、過去や未来への自己存在の不安が背景に沈んでいくように考えられた。「ずっと考えている（小５の時の嫌な体験)」と語るが、怒りや興奮はないようであるという発言がそのことを示唆している。

５．支援

プレイルームでの関わりが学校生活と連動していると考えられた。相撲への関心は依然から強く小学校２年生の時には放課後担任の先生と相撲を取ることを楽しみにしていた（浦崎、2010)。プレイルームにおいても、相撲の話題が出ると小６の３月や７月には２つぬいぐるみを力士に見立てて向い合せて相撲を取ったりすることが見られたが、小６から中１にかけてはソファに横になり頭をカバーで隠して話をすることが多かった。その頃は「はずかしい」という発言が目立った。筆者は、本児の話に耳を傾け、筆者との関わりが途絶えないように、ともに時間を過ごすことを大切にした。そして、その場が本児の快の体験ができる場として相撲の話題がでたときは、ぬいぐるみを力士に見立てて「相撲遊び」をした。その中１の７月にはキャッチボールにも興味を示した。Ｔｈが獲れない程の剛速球を投げ込んできた。そのキャッチボールを通した関わりはしばらく続いた。投球のホームを変えたり、返球を素早く投げたり、返球ホームをスローにしたり、投げる時の球の速さも変化させたり等、ややもすれば単調になってしまうキャッチボールのやりとりが楽しくなるように工夫をした。

中１の10月には学校でもお気に入りの先生とキャッチボールをする等プレイルームのなかでの関わりが学校でも見られるようになる。また、学校で担任の先生と身体を「こちょ、こちょ」とくすぐりあうことが増えると、同時にプレイルームでも同様の行動が見られるようになり、現実とプレイルームの関わりが連動するようになったと考えられた。

それは帽子で顔を隠さずに来室した頃であり、外の世界がよく見えてきた印象を受ける。帽子で顔を隠すこともなく、しっかりと目を合わせ、しっかりとした足取りで歩いている。現実的な話が増え、イライラした印象はなくなり、急に「かっ」と攻撃性を向けるようなことも減ってきた。中１の９月にはキャッチボールをしている際に、Ｔｈは「高須クリニックの人に似ている」と述べる。サッカーの話題

になり、「本田慶介とロンブーの亮が似ている」等とプレイのなかで顔について話題が出てくる。顔への意識が高くなってきたように感じられ、口を大きく開けたり、表情を変えて投げたりするように心がけると食いつくように顔を覗き込んでくる。

中２の６月には自分のなりたい妹の顔は「ＫとＩちゃんを合わせた顔」と言う。以前から顔への意識は高く、祖父のいたずらをした時の顔等、顔を含めた相手の行動や反応に興味を向けていたが、ここでは他者の顔を比較する等の顔に焦点化した意識が出てきた。他者や他者の顔への肯定的な興味、他者とのやりとりと結びついた他者の顔や表情の受け止めがどのように可能になっていくのかは一つの関わりの視点である。＜私＞というものの確立とともに、他者の顔や表情を含めた他者理解がどのように形成されていくのかという点については今後の検討課題である。

他者への意識が高まっていくなかで、支援において「他者と関わり」をどのように展開させていくかが重要であると考える。直接的身体的な関わりよりも言葉を発した表現が多いこともあり、Ａ男の言葉を拾って、どのように関わりを膨らませて手ごたえのある体験に結びつけていけるかが重要であるように考えられた。

自分ペースで語り続ける言葉を使ったやりとりが展開しない時と現実的なやりとりが上手く展開する時が生じるが、Ａ男との語りを繋ぎとめるための関わりが必要に考えられた。Ａ男の発する言葉を共有するための働きかけ、ホワイトボードを使用し、「あの世」と「この世」についての語りを聞き取り記録し図示する等、その世界をやりとりを通して理解していくなどの対応が必要と考えられた。Ａ男に届きひっかかるようなＴｈの言葉を、共同の関わりのなかで見つけ、Ｔｈから働きかけたことへのＡ男の反応性を高めていくことが必要であると考えた。キャッチボール、ぬいぐるみのイルカを使用した関わりや言葉を用いた相互作用を通して地に足がついた関わりの土俵やコミュニケーションの基盤を形成すること、相互にやりとりする生きた言葉、世界の理解を形成していくことが重要であると考えた。

Ｖ．総合考察

一貫して語る将来、自分がなりたいＩちゃんの姿は、自分が思い描いている理想の＜私＞の姿であると考えられた。ただし、「＜私＞の姿」として明確に語っている訳ではなく、あくまでも「あの世」でなりたい「Ｉちゃんの姿」として語っていることの所以については今後の検討が必要である。

アイドルや学校のお気に入りの対象が気になる重要な他者となり、同一化を望むようになっていったと考えられた。「この世ではＨ」、「Ｈは名前を変えているだけ」と語り、「この世」での同一化は男の子の名前との入れ替えであるが、一方、将来、「あの世」に行った時に思い描く本児の姿は自分の好きな女の子の姿である。

将来の自分の思い描く、「Ｉちゃんの妹になって、兄弟になって、身体が大きくて、先生やっていて、髪の毛の長さが普通」等の具体的な本児の姿は、彼の永遠の安定感を得たいという願いを表現しているように映る。学校での生活におけるお気に入りの重要な他者の存在は、本児が将来なりたい「＜私＞の姿」を描く上で大きな影響を与えている。従って好きな女の子が増えることで、将来の同一化したい自分の姿も揺れて、困惑する姿が見られた。しかし他者との関わりが増加し、生活する世界が広がりを見せていく過程と並行して、将来、Ｉちゃんになりたいと思い描く「＜私＞の姿」が「Ｉちゃんの妹になって、兄弟になって、身体が大きくて、先生やっていて、髪の毛の長さが普通」、「ＫとＩちゃんを合わせた顔」等と述べているように具体的に明確化されていくプロセスが見られた。

不安定になればなる程、これらのお気に入りの他者への同一化を望み、未来の＜私＞の姿をより具体的に創造しているようである。その行為は、安心できる脅かされない世界としての「あの世」で、なりたい＜私＞の姿を思い描くことで、今の安定を保とうとしている行為として考えられた。現実で困惑したり、想定外の苦しみや不安を抱えたり、モデルとなるお気に入りの対象が増加する等の現実の影響を受けることで、再度「あの世」の＜私＞の姿を練り直すことを通して安定を図っているようにも考えられた。お気に入りの重要な他者との関係が現実に生まれ、心地よい体験を積みながら現実に向き合い、そして苦手な課題や抵抗のある物事への取り組みから生じる不安を想像上の安心できる世界を規定しつつ安定を保つという、本児の生きるかたちはフラッ

シュバックの現象や外傷体験による不安を軽減させる要因だったように考えられた。

浦崎（2002）の報告した他者との関わりを避けて、それまで支援を受けずに育ってきた青年期の事例は、身体、名前、親が異なり、光よりも早い、現在の身長を30cm伸ばした２ｍ以上の到底叶うことのない現実離れした自分の理想の姿を、現実（「この世」）に求めて苦しんでいた。それに比較して本児は「この世」と「あの世」を切り離しながら安定や適応を得ていると考えられた。

支援は、自閉性スペクトラム障害児の＜私＞を他者に置き替えながら自分の安定を保とうする機能、その安定を基盤に自己を形成していこうとするプロセスへのサポートが必要である。その支援はまずは筆者と本児の関わりの糸口を作り出し、その接点を通したやりとりの延長上に生まれてくるものであると言える。

Ａ男の発する言葉にＴｈが関心を示すように関わっているが、Ａ男から発する言葉を拾って受け止め、その意味を繋げながらやりとりを継続させることは長く続くことが少ない、自分の自伝や回想を語る高機能自閉症者のような＜私＞探しの彷徨いと知能検査による「類似」、「単語」、「理解」の顕著な低さが根底に見られ、因果関係や言葉の概念の理解等の遅れが考えられる本児の発する言葉の発達の程度は異なり、両者の言葉がもつ意味を同等のレベルとして理解することはできないと考えられる。しかし、その発達の段階に関わらず、本児は他者との関係性が絡む言葉の世界での分からなさ等の違和感を感じていると考えられ、その違和感が今の自分をお気に入りの他者に変えたいと強く願うことに結び付いていると捉えることもできる。従って、どうにもならない現実ではなく、「あの世」という別の世界に今とは異なる理想の他者になれる世界が開かれていると漠然と意味づけたと考えられる。障害や知的発達の程度の影響により現実を理解することへの限界が、本児なりの独自の意味づけへと繋がったと考えられる。その表面的に映る言葉をどのように理解し、支援の在り方へと結び付けていくかは今後の課題である。

本児が示している漠然とした不安や不全感を解消するため安心感、安定感を求め、今の自分を変え、別の他者になろうとすることや別の世界を求める願いは、発達の程度に関わらず存在するものであると考えられた。ドナが５歳の時にキャロルと出会い、キャロルと一緒に笑うと周りの他者も笑うことに気づき、キャロルを演じることを身につけるようになった。それからその実在の人物のように振るまい、「キャロルならどうするのであろう」ということを常に考えながら、自分の行動のあり方を確認する行動が見られたが、本児もお気に入りの女の子なら自分の行動について「どう言っているのか」等と彼女の反応を母親に確認し、自分の行動を変えようとするドナと同様な行動が見られた。

自閉症スペクトラム障害を有する彼らが、「なりたい姿」とそれが実現できる世界を求めながら生きていくかたちが障害の程度や発達の程度に限らず存在すること、そして理想の他者へと同一化したい思いとそれが実現できる世界を求める彼ら独自の意味づけを理解し、その理解に基づく具体的支援のかたちを検討することの重要性が示唆された。学校や家庭で安心して生活できる環境の整備と彼らが求める彼ら独自の漠然とした不安を解消するために意味づけられた解決策を理解する、外的状況の把握と調整、内面世界への理解と支援を考えていく姿勢が求められていると考えられた。

引用文献

別府哲(2007)　自閉症における他者理解の機能連関と形成プロセスの特異性　障害者問題研究，34(4)，259－266

杉山登志郎・辻井正次編著（1999）高機能広汎性発達障害　アスペルガー症候群と高機能自閉症　プレーン出版

Gunilla Gerland (1997) A REAL PERSON. London: Souvenir Press. ニキ・リンコ訳 (2000) :ずっと「普通」になりたかった. 花風社.

Liane Holliday Willey (1999) Pretending to Be Normal Living with Asperger's Syndrome. UK: Jessica Kingsley Publishers Ltd. ニキ・リンコ訳 (2002)：アスペルガー的人生．東京書籍

浦崎武(2002)　自己同一性と就労の問題をもつアスペルガー症候群の男性の事例　―本当の身体像を求める青年との遊戯面接における関係性の形成とレゴ制作―．ミネルヴァ書房．発達89．95－103

浦崎武（2010）アスペルガー症候群の子どもの学童期におけるフラッシュバックと自己存在に関する不安　―発達にともなう行動の変容と関係性に焦点を当てた支援のあり方―
琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要第１号.

浦崎武（2011）アスペルガー障害における聴覚過敏性への重要な他者との関係性の形成が与える影響 ―事例による行動の変容を通して― 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要第２号.

Williams, D (1992) Nobody Nowhere. New York: Avon books, 高野万里子訳（1993）：自閉症だったわたしへ．新潮社.